
あたいと大ちゃんのあそびにっき

ルーミア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あたいと大ちゃんのあそびにっき

【Zコード】

Z7036Z

【作者名】

ルーミア

【あらすじ】

氷の妖精チルノ、その親友である大妖精。

この物語は2人の笑つて泣けない友情秘話を描いたものである……と言ったのだが、基本的にはバカしかやらない。

作者は東方を詳しく知りません。原作のeasyモードをクリアして歓喜狂乱舞した程度です。キャラの詳しい説明は【ピクシブ百科事典】を参考にさせてもらいました。

だい？わ 【先生になりたい】（前書き）

東方の原作（初期だつたかな?）をプレイして、1面のルーミニアと2面のナルノをボッコボコにした記憶があります。勿論 easyモードで。

あいつらwww俺にボコられて泣いてやんのwww愛い奴よwww
だが、3面の中国。テメエはダメだ。強すぎる。

そんな作者が別作品の連載で休息の代わりに書いた作品。
短いです。

だい？わ 【先生になりたい】

人間界で言つといひ、季節は夏。幻想郷はジリジリと今日も暑い。

だが、とある妖精の住み着くこの湖。

近づけば分かるが、非常に心地よい气温。いや、ちょいと肌寒いくらい。

賢明な読者なら、もうお気づきであろう。

そつ、この湖こそが本作の舞台となる【霧の湖】なのだ。

朝日が昇り、小奇麗な湖の上空を飛ぶのは一人の少女。

髪は薄めの水色で、ふわふわのウェーヴがかかつたセミショートヘアーに青い瞳。

背中には氷の結晶に似た大きな羽を持ち、頭の後ろに同じく青い大きなリボンを付けている。

服装は白のシャツの上から青いワンピース（スカートの縁に白のぎざぎざ模様）を着用し、首元には赤いリボンが巻かれている。

霧の湖の端、陸地と繋がる縁の広がる場所。

そこに佇んでいた、これまた同世代くらいの少女へと近づいていく。緑髪をサイドポニーにまとめた少女もそれの存在に気付いたようで、大きくこぢらへ手を振ってきた。

満面の笑みを浮かべた『チルノ』が、「大妖精」の元へと飛んできたのだ。

『大ちやーん！おはよー！ よいじょつと』

「あ、チルノちゃん。おはよー」

『ねえねえ大ちゃん、さっきねつ！あたいねつ！えつとねつ！凄いのをねつ！えつとねつ』

「あはは、少し落ち着いて話しなよ～」

『すうじいの見つけたんだ！ 大ちゃんにも見せたげる！ ジャーンー！』

「…うーん、これはカエル？ これがどうかしたの？」

『大ちゃんにそっくりでしょ！？ あたいつてば天才ねつ！』

「…お、おおつふ…」

注意、とても仲の良い二人です

【 だい？わ 先生になりたい 】

『ほり、顔のじじをじつやつて…じじもじつしてじつやると… 大ちゃん最終形態だアー！』

「ふふ、チルノちゃん。おふざけが過ぎるよ」

『あ、それはそつとね、大ちゃん』

大ちゃん最終形態を投げ捨てたチルノは、額に青筋を浮かべた大妖精へと別の話題を振りだす。

最終形態は最終形態で、やつと解放されたぜ…と自分の顔を本来の力エルへと戻していた。

『さつき人里まで下りてみたんだけど、いやー、あたいぐらいの人間が一杯歩いててさー』

「ふんふん、村に下りてみたら小さな子供たちがたくさん歩いてたと『

『そうつ！それでね？その人間たちが入つてつた古い建物があつて、みんな一緒に勉強してて、建物の看板に真つ黒な文字で、てらちいさいんあ、つて』

最後の方、発音を誤魔化したな

「…「うん もしかして、‘寺子屋’のことかなあ？」

『？ 寺小屋つてなに？』

「一言でいうと、子供たちが集まつて学問に励むところ。ほら、この間拾つた本に文字がたくさん羅列されていたでしょ？ あれを使つて、大人が子供に教えを説くんだよ」

『ヘエー！大ちゃんすつげエ！物知り！しゃつベエー！』

鼻息が通常の六倍ほど荒くなる。

『じゃあ、今日は寺子屋』つこして遊ぼうかー・じうせ暇でしょー・？』

「じうせつ ？ う、うん まあ、暇だよ」

『そんなら あたいが大人を演じるわつ！ 大ちゃんは大人に**もてあそ**ば

れる健気なピヒロ、俗に言つ子供を演じてねつー。』

「うんつー……え?」

『よつし、スタートオー!』

チルノの叫びが湖にこだました。
つと、青のワンピースから左肩だけを脱がし
自分の小指を唇へと運び、熱い吐息を一つ
チルノちゃんんつ
!?

『……つはあ あたいが、大ちゃんに大人の、良い事、を教えてあげ
る……』

「一回止めて、止まつてチルノちゃん」

『緊張しなくていいのよ……大丈夫……あたいに任せで……』

「ちよ、そんなとこ触らないで あの、まじで……」

『ほら……ここがもつこんなに……』

「触んなつー!」

『ぐああ! いま殴つた! ? 大ちゃん、いま殴つた! ?』

氣のせいだよ（超いい笑顔）

そつか! あたいつてば勘違ひしてた! （超いい笑顔）

お互^いいにえへへ^へと笑顔が溢れる。なんて仲良しな2人。

「でもチルノちゃん、その大人はダメな大人だからやめた方が良いんじやないかな。一部のM男しか喜ばないんだよ？ チルノちゃんみたいな体系でやられたら、下手すりや誰得だよ？」

『そなんだ！？ やつベエ大ちゃん、まじ物知り！ 博士^{はくし}！…』

「今度は私が大人[…]ってか先生をやるから、チルノちゃんは生徒をやつてね」

『‘せーと、つてなに？』

まじかこいつ

「…えっと、私が学を^与える人、チルノちゃんが学を^与えられる人^つてこと」

『言い換えれば大ちゃんが能動態！ あたいが受動態ね！』

「…ん？なにそれ…」

『さらに言い換えれば大ちゃんが責め！ あたいが受けね！』

「…そ…う…かもね？」

『つしゃアーおつけーね！』

大妖精は少し考えるそ素振りを見せ、コホン^ンと咳払い。

左手に何か書物を持つているティーストを装いつつ先生役に入った。

「んーつと… い、 1 + 3 = ?」

『解せぬつ！』

「… 1 + 1 = ?」

『いっぴいつ！』

「どうするチルノちゃん？ 何か別の遊びしない？」

『大ちゃん？ なぜ急に大人を演じなくなつたの？ 演じる人生に疲れたの？ あ、 妖生か』

「ねえねえ、 別の遊びにしよ？」

『じゃあ今度は2人で大人の事情に振り回される悲劇のマスコット ピエロを演じよつー！』

「さつきから気になつてたんだけど、 なんでチルノちゃんが、 子供’ という単語を変換するとそんなに重くなつちゃうの？ なに、 ピエロつて」

『大人の先生は別に用意だつ！ そりつー出てこい！』

『ぐわア』

近くにいた湖の妖精をチルノが引っ張り込む。
本編では立ち絵の一つもないのに、 容姿は読者各自の妄想力で補つてほしい。

まあ、大妖精も立ち絵が（一）の地の文は削除されました

『かくかくしかじかまるきゅーだから、あたいたちに教えを説いてよね！ 最初からこの小説読んでれば大体察せるでしょ！』

『解せぬつー解せぬつー』

『えエーー！？ あんたつて本当に^{ほんつと}？ ねエーー』

『解せねエーーまじでー』

今の一言は悔しいだらつなあ、と大妖精はモブ妖精に同情。心から。

『いいー！？ あたいらを満足させるよつな授業をするのよー！？ でなきや冷凍保存だからねー！』

『上等だ嬢ちゃん、あとで泣きながら俺の靴を舐める』としなるぜ

「（一）の妖精、本当にモブ？ かんぬく貫禄かんろくが出てるんだけど」

モブ妖精が低い声で席につけ…つと呟く。
と言つても、この湖に席などないので、地べたに腰掛ける事になるのだが。

いつのまにやらサングラスを装着したモブ妖精に、大妖精がそつと耳打ち。

「…適当に坐つたら抜けちゃつていいからね、チルノ嬢ちゃんもすぐ飽きるだろつし（（ヒツヒツ）」

『… それは出来ねエ相談だ大妖精、俺は確かにブー太郎だが、一度引き受けた仕事は最後まで突き通す主義なんだ。それが自分との約束なんでな（）ヒソヒソ』

「ねえ、あなたもしかして自機の座を狙つてる？ なんのそのキヤラは（）ヒソヒソ」

『自機…か… そんな玩具もののために争つてんのかと思つと泣けてくるぜ…（）ヒソヒソ』

『… 確かにな。でも、それでも譲れねえ玩具ものつてのが、あたいにはあるんだ。何で言われよつが、この生き方を変えるつもりはねエ（）ヒソヒソ』

「… チルノちゃん、いつから聞いてたの…？」

「ああ、いつなつたらわつたと授業もどきを終わらせてしまおつ！ 所詮はモブ妖精の知恵、ヤフ知恵の方が幾分マシな知能を装備してあるわ！」

「かかってこいモブ妖精！ チルノちゃんを遙かに凌駕する私の脳を舐めるなあ！」

『そりだぞオ！ 大ちゃんの頭脳にかかれれば解けない問題などないツ！ な、明智君（チルノ目一杯低音声）。はい、チルノさん！（チルノ裏声）』

『原点とX軸上の点H（1,0）の間に原点からHに向かつて順番に点H0（0,0）, H1（X1,0）, …, Hn-1（Xn-1,0）, Hn（Xn,0）が等間隔に並んでいる。ただし、

$H^n = H$ である。

ここで、関数 $f(x) = x^2$ に対して、線分 $H_k - 1 H_k (k = 1, 2, \dots, n)$ を底辺とする高さ $f(x_k)$ の長方形の面積を R_k として、 $S_n = R_1 + R_2 + \dots + R_n$ とおく。また放物線 $y = f(x)$ 、 x 軸、直線 $x = 1$ と囲まれる領域の面積を S とする。次の問いに答える。

1 S_n を n の式として表せ。 2 $S_n - S > 100$ 分の 1 となる最小の n を求めろ。 3 僕のフルネーム

解ける気がしない。これが大妖精の最初の言葉であった。溶ける気しかしない。これがチルノの最後の言葉であった。

『チルノと！』「大妖精の！」『「今日の教訓！！」

【身の丈に合った遊びをしよう】『あたりに学問は早かつたわね』

』

だい？わ 【先生になりたい】（後書き）

読破おつかれさまでした。

チルノ好きに、大ちゃん好き、心の底からゴメンなさい。
でも、これが僕にとっての2人なんです！！
そこは譲れません！ まあ、二、三万積まれれば譲るけど。

では、次回（？）に会いましょう！ ばいばい！

だい?わ 【やせたい】 (前書き)

先ほど、東方風神錄にてケロちゃんとタイマンを張りました。
勝てるようになつてないだろ、あれ。

アンインストールしたろか…… という憤怒の心情を抑えつつ僕が開いたファイルは東方紅魔郷であった。

行く先は決まつている、2面のチルノだ。

ああチルノよ…… やはり君は落ち着くなあ…

ボッコボコにしたりました。

決してチルノが嫌いな訳じゃないんです。

大好きなんで。好きすぎて会いに行つちやうんです。
そこん所を勘違いしないで下さいね。

だい?わ 【やせたい】

幻想郷の一部、透き通つた水に濃い霧、草の生い茂つた自然の大地が広がる霧の湖は今日も平和です。

湖の妖精たちがあつちへ行つたりこつちへ行つたり……特に目的もなく飛んでいるところを見ると

【ほほ無頓着にネット上を転々とする人間界の住人】を連想します。

それぐらい湖は平和です。平和が一番です。

そんな妖精たちがあれよあれよと過ごしている中、1人黙々（もぐもぐ）と浮き上がつたり下りたり……浮き上がつたり……下りたり……を繰り返す「大妖精」の姿が湖の島上にあつた。

首を傾げたかと思うと、大妖精が次に向かつたのは湖の水面。島の大地から水面を覗きこみつつ、自分の頬を人差し指でぷにぷに

ツー?

咄嗟に撫でたお腹に腰周りを確認し、大妖精の疑問は確信へと変わる。

まるで自身の死を悟つた病気持の老人のように……その眼差しは闇に覆われ一筋の光も無い。

そこに現れた同世代くらいの少女、氷の妖精『チルノ』。

大妖精が話しかける。

「チルノちゃん、笑わないで聞いてね?」

『どしたの大ちゃん いつもの数十倍顔がマジだけど 便秘?』

「あの、実は体重が『げはははははwwwwwwワロ』氏ね」

「酷いよチルノちゃん… せっかく勇気を出して相談したのに…」

『なるほど、冗談の通じない状態つてわけだね！だから徐々にあたいの首を絞める握力が上がつていってるので！安心して大ちゃん！あたいが良いダイエット方法を教えてあげるから！』

「え！ 本当に！？」

『あたいは天才なんだから何でも知ってるのよ！ それに親友の大ちゃんの頼みなんだから断るわけないでしょ！ だからそろそろ本当に手を離してください全身が麻痺してきました』

「ありがとう… ありがとうチルノちゃん！」

『おかしいな、あたいは周囲からバカって呼ばれてるけど 泣き笑いしながら親友の首を絞める妖精なんて さすがのあたいでもおかしいなと思うよ、うん だから離してよ大ちゃん、全身どころか舌まで回らなくなつてきました あたいの本能が危険信号を発してい るんだ』

注意 とても仲の良い二人です

【だい?わ 痩せたい】

ここは森の広場。

周囲が高い木で囲まれ、それ以外は本当に何もない森のなかにポツカリと開いた広場だ。

恐らく湖の近くにあるのだらう。たぶん、ね。

『さてとだ大ちゃん!』

両腕を腰に当て、えつへん!と胸を張るチルノ。

『状況を整理すると大ちゃんは豚である己の体系を恥じたために可憐でシユレンダーな体系を維持するあたににこの呪われし因果を解き放つよう協力を依頼してきたことだね!?』

「うん、間違つてないよ」

大妖精の顔がここまで歪んだのは初めてだ。

ラディッシュ如きのスカウターであれば瞬間で粉々に出来るほどだろう(推定)。

『最近は里の方で【部分痩せダイエット】が流行ってるみたいだね! 気になる体の豚部分を集中的に痩せさせるつて方法らしいよ!』

「へーそなんだ! チルノちゃんつて人間の風習とか流行に詳しいよねえ」

『まあ、定期的にイタズラしてるからね! この間も店主の目を盗んで商品をパクってきたわよ! メガネ曇らせて焦つてたわ!』

「うわあ、氷の妖精とは思えないイタズラ」

『じゃあ、大ちゃんは自分の体のどこが豚だと思つの？』

大妖精はそわそわと体を動かしながら、自分の腹や尻を軽く触つて
みた つう……

その時、大妖精に電流走る。ざわ…ざわ…

「やっぱり太ももの部分とかかなあ、悔しいけど」

『そんな豚足を携えた大ちゃんにはこれ！ブルブル振動する布オ（
チルノダミ声）これを気になる部位に巻きつければ自然と脂肪は
ピチコつてしまふんだ！（チルノダミ声）』

「わー凄い凄い！まるで夢のような装置…全ての少女が恋い焦が
れるような装置ね！でもお高いんでしょ？」「

『「Jーりんの店からパクつてきたから盗品なので 無料で大ちゃん
に提供しちゃいます！』

「森近さんのツ！？あ、わつきパクつたって言つてた商品でこれ
か！」

チルノが取り出した布（香霖堂の煽り文句によると脂肪燃焼マシン）
は、見た目だけならただの布と変わらない。
広場に座り込んだ大妖精。

ものは試しとスカートをたくし上げ 太ももに巻いてみる。

「えーっと、これで… 『準備出来たよ チルノちゃん』

『よしー。』

「…………」

『…………』

「…………」

『ほり、大ちゃん！ 振動させないとー。』

「えー！？ 私が振動させるのー。？」

『他にどんな方法があるとー。』

「あれー！？私が間違ってるのー。？ 自動で振動して脂肪を燃焼する道具だと思ったのにー。」

『甘えるな大ちゃん！そんな樂をしていたら減るもんも減らないでしょー！ 楽して手に入れた夢ほど残酷な惡夢はない、あたいはそう思ふ』

「そ、そなのかなあ……」

大妖精は太ももに巻かれた布を手で揺らしてみる。

「…………」

布と一緒に揺れる自身の肉が切ない。

『まあ、こんなことで痩せるわけないわね』

「…………」

『むしろ、こんな方法で脂肪が燃焼されたら幽々子よひことか毎晩毎晩ジギングなんてしないでしょーよまったくもつ『めんなさい』『めんなさい』』

「良かつたねチルノちゃん、私たちが親友じゃなかつたら謝罪しても許せなかつたよ?」

『ごめんね、ごめんね大ちゃん、でも親友だつたら相手の顔を握りしめて地面に叩きつけたりしないと思ふんだけ

ちよ、喋らせしゃべらせ』

『まさか悪戯いじなもで威張つてたんじやないよ?』 別のダイエット方法があるんだよね?』

『あります!』

『あります!』

チルノが解放される。

あと一撃で地面の穴の数が一桁を超えるところだつた。(さり顔面セーフね! b yチルノ)

『幽々子よひこもその効果に絶賛したと言われているジヨギング! これを上回るダイエット方法は幻想郷に存在しないわ!』

「えー… 私 運動つて苦手なんだけど…」

『苦行を乗り越えた者にこそ至福の時は訪れる 幽々子よひこだつて苦行ジヨギング』

「乗り越えた後は至福の時に漫かつてゐるわよー。』

「なんでさつきから西行寺さん名前に変な呼び名をつけてるの？あと、それ本当に瘦せてるの？リバウンドの典型的な例なんだけど

『

『走れば大ちゃんが氣にしている足回りの豚肉在庫処分が出来るわー。』

『もうスルーしないわよ わきからちょくちょく私のこと豚呼ばわりしてゐでしょ』

『じゃあ行くわよ大ちゃん！ あたいの後に続いて！』

チルノは自慢の氷性6本羽で飛び上がり
ジヨギングは！？

『あたいら妖精は宙を走るティンカーベル！ さあ、大ちゃん！
行こつ！』

『これつて足の脂肪と関係ないよね！？』

とりあえず大妖精も飛ぶ。

森の木々を10数メートル進んだ頃じゆだらうか、とある木の前でチルノが空中静止。

『あ、見て見て大ちゃん この葉っぱってね 凍らせて碎くと面白い音が鳴るんだよ』

「へえ、そつなんだ でも葉っぱを碎く音の聞き分けが出来るのは

チルノちゃんぐらいだよねえ』

『えつとー この花は凍らせると自然に壊れちゃうんだあ 碕きたくなつた時はゆっくり凍らせないとダメよー』

「やうなんだ チルノちゃんは色々な植物に精通しているね」

『あーこの実！ 食べるとおいしくー あぐ… 大ちゃんも、ほらー』

「あむ… あ、甘~い」

『いじつちの実はちょっと辛いのよね！ あぐぐ… 辛ッ！』

「どれどれ～ あむむ… 辛いッ！」

『でも一つを同時に食べるとおー… 酸っぱいー』

「酸っぱいー酸っぱい！ でもクセになるこの味！」

『でしょー！ あたいつたら天才だから新しい食の文化まで開化させちやうのよねー！』

といひでチルノちゃん、ジョギングは？ （迫力のある顔）

お腹へつちつた サーセン (実を口の中一杯に頬張つた顔)

もついいよ… つと大妖精は告げると、木の実を頬張り続けるチルノを尻目に降下。

頭の上に食べカスが落ちてきたが怒る気力も無い。

はあ～… ダイエットの仕方なんて思いつかないしどうしよう… ん?

大妖精の視界に入ってきたのは、森の中で木に腰掛けているモブ妖精。

モブとは思えないサングラスに言動、知恵をあわせ持つ妖精なのだ
が詳しくは1話を参照。

『お、どうした大妖精 頭汚ツー』

「なによー 出会いがしら急に ほんとだ、頭汚ツー！」

チルノの食べカスを振り払う。

『なるほどな、チルノの協力のものダイエットを決行したは良いもののが近く失敗したと』

「すごい 一言も説明してないのに現状を把握してる

『……っにしても大妖精、おまえ… そこまで太ったか？ 僕の目にはそう見えないんだが』

「え？！？ ラーメンマン、と、モンゴルマン、ぐらいの違い
があるわよー？」

『うーん よく分かんねエなー… まあ、ちょいと座れや』

モブ妖精は懐に手を入れ取り出したのは、一枚の写真。

「……人間？」

大妖精の言う通り、写っていたのは一人の人間の女の子。年は人間で数える1・2、1・3だろうか。こちらに向かつて微笑みかけており、その肩にはサングラス姿のモブ妖精が腰掛けている。

『こいつは俺の娘だ 今年でおまえとタメを張る年だな』

「どこのまで本当なの？」

『全部だ なんだ、妖精が人間とガキを作っちゃダメなんて決まりでもあんのか？』

モブ妖精がタバコを咥え、ライターを懐から取り出す……が、火がつかない。

痺れを切らしたのか指をパチン と鳴らしタバコの先端を発火させた。

『つふうー……昔前に、こいつも大妖精と同じこと言いだしてな やれダイエット始めるだの、やれ晩飯いらねエーだの、お父さんの口臭いだの、友達家に呼ぶからお父さん部屋から出ないでよねエーだの』

「そうだつたんだ……」

『まあ年頃の女の子だからな、仕方ねエーって最初は思つてたのよ 綺麗な姉ちゃんのたくさん載つてる雑誌とか部屋で読んでてな、憧れてたんだるーよ』

「なぜ部屋の中の様子まで知っているの？」

『だが俺は良い気持ちしなかった 何故かわかるか?』

「ど、どうしてでしょうか?」

タバコの煙を吐く。

『自分の子が日々痩せ細っていく姿なんて見てて気持ちいわけねエ
だろ? 俺には分からねエが、どーも年頃つてのは周囲に感化され
やすいんだ 合理化つてやつか? 自分を憧れの存在に近づけたい
つて欲求にかられんのよ』

「そう……だったんですか……」

大妖精は気付く。

私は無意識のうちにチルノちゃんに嫉妬していたのかも知れない。
自分の体重がちょっと増えたからってチルノちゃんに裏切られた気
持ちになつて……。

『……大妖精 あんたも同じなんだろう? 自分の本当の気持ちに気
付いたんじやないのか? 大丈夫、あんたは太つてなんかねエ 女
の子つてのはちょっと丸つこい方が可愛いんだぜ』

「……はい、ありがとうございます」

『……つへ、ガラにもなく説教しちまつたな、重く考えんなよ ただ
の子持ち妖精の戯言だ』

「いえ、ありがとうございます! 何だか気持ちがスッとしたしました

！」

『おひ、分かつたら次回作の自機の座をくれ』

大妖精は満面の笑みで飛び立つ。

背後でモブ妖精が叫んでいるが、彼女の耳には入っていない。

向かう先は決まっている、チルノの元だ。

「ずいぶん酷い事をしちゃつたし謝らないと……ごめんね！チルノちゃん！」

「あ、いた！チルノちゃあーん！」

先ほどと同じ場所、美味しい実のなる木の上にチルノは飛んでいた。

『ん？ どうしたの大ちゃん 便秘？』

「どうして私と会うと第一声が便秘なの？」

それから一人は夜が更けるまで実を食べ続けた。

時には笑いあい、時には苛立ちを募らせ、最後には笑いあつた。
2人を隔てるものなど何もない。

幻想郷の一部、霧の湖。そこには妖精が住み着いています。

それは仲が良く、信頼しあい、仲間思い、他人を思いやることの出来る妖精です。

『だからさ、困ったときは助けあうべきだと あたいは思うのよね』

「勿論だよチルノちゃん 神の気紛れで集められた妖精同士、協力し合つていかないと」

日いちが変わつて次の日。
チルノと大妖精の腹は膨^{ふく}らみ、妊娠何か月ですか？ 2年ちょっとです が成立しそうなほど立派に脂肪を蓄^{たくわ}えられていた。

そんな彼女たちの前には、眉間にシワを寄せたモブ妖精。

『いつたい 木の実をいくつ食つたらこうなるんだよ…』

『あの一帯になつてた実は全部ね！ やっぱり乙女は甘いもの好きなのね！』

『うつせーよバカ』

一週間ほどかけて、2人はモブ妖精監視下の元 熱血特別指導ダイエットを行うことになる。

無事にお腹は元に戻りました。

『チルノと！』「大妖精の！」『「今日の教訓！」』

【日々の食生活を改善しよう！】『妖精は太らないって設定を神主が作れば良いのにね！』

だい？わ【せせたい】（後書き）

読破お疲れ様です。

なんだか東方一二次創作にハマった気がしなくもない作者でした。

ではまた次回に、さよなら～

だい?わ 【光の三妖精あらわる】（前書き）

本当に「めんなさい」。

光の三妖精ことサー＝ミルク、ルナチャイルド、スターサファイアが見事にキャラ崩壊の一途とを辿っています。

苦手な方は、お手数ですが戻るボタンをクリックなされた方が宜しいかと。

ちなみに、三妖精の詳細を今まで知りませんでした。

ずーっとチルノの友達か何かかと思つてたんですけど、違うんですね。

うむむ…東方とは奥が深いのう…

かなりマニアックな小ネタが入っているので、分からぬ読者が多数いると思いますが、そこは氣合と根性とチルノへの愛で乗り越えてください。

だい？わ 【光の三妖精あらわる】

ここは幻想郷。

人名つぼくすると玄宗京。^{げんそうきょう} なんだか お坊さんみたいですね。

そんな不思議な空間の一部、【霧の湖】から少々外れた位置に木々に囲まれた広場があつた。

普段から利用されているこの広場は、妖精たちの溜まり場である。同士と戯れる妖精、個々で業に励む妖精、はたまた息抜きの場に活用するなど、霧の湖に住み着く妖精からは大変 重宝^{ちゆうほう}されている広場なのだ。

『それー大ちゃーん それそれそれー！』

氷の妖精『チルノ』が手に握っているのは、里から借りてきた（チルノ談）オモチや。

先端が二又に分かれた木の棒に糸を括りつけ、石か何かを的に飛ばして遊ぶのだそうだ。（パチンコ）

「あ、危ないよチルノちゃん やめてよー」

チルノの飛ばす小石を体に当たられ、広場を逃げ回る大妖精。的にされた大妖精は本気で嫌がつてているようだ。

人間の子供が作つたとはいえ、これがまた地味に痛い。良い子の妖精は真似しないように。

だが、そんなことはお構いなしにチルノは笑顔で大妖精を追いかけ

る。

『いえええええい！ レツツパアリイー！！！』

「やめて！ やめてつたらあ！」

『チャージショット・ドウクシッ・ドウクシッ！』

「ボムツ！」

『ぐあ、』

大妖精の投げた石がチルノの顔にクリスティカルヒット。

「おひあ！」

倒れたチルノに蹴りを一発。

「ダメでしょチルノちゃん 相手が嫌がる事をするなんて、もっての外だよ」

『あたいの道を厚生^{いっせい}してくれたのは嬉しいけど 最後の蹴りって意味あつた？』

『^ま真の支配者とは絶対的な暴力をもつ者なの 皇帝なの、ナポレオンなの！』

『そつか！じやあ最後の蹴りは賢明な判断だつたんだ！ すつげえ大ちゃん！暴君！』

‘真の支配者’って部分には触れねえのな……

木に寄りかかる《モブ妖精》の呟きに答える者はいない。

注意 とても仲の良い二人です

【だい?わ 光の三妖精あらわる】

「ちょーっと待ったアー！」

広場にいた全妖精の視線が集まる。
突如 現れた3匹の妖精に対してだ。

『あ！ あいつは！』

「え、チルノちゃんの知り合い？」

「ふつふつふ… お初に見える妖精も多々いるようなので、名前を
教えてあげるわ！」

3匹の真ん中に立つ妖精。

オレンジのかかつた金髪のセミロングで、両側を赤いリボンで
二房のツーサイドアップで括つている。

その頭の上には白のヘッドドレス。瞳は青、大きく笑う口からは
八重歯。

白のブラウスに赤いスカート、首元には黄色いリボンを巻き、赤い
腰巻が腰にある。

そんな彼女は、ポカーンとする妖精たちの前でビシツと指を立てる。

「私の名前はサニー」と、サニーミルク、！ 知的で狡猾なサニーちゃんとは私のことよー！」

『あれ？ トルゴンアシュ君じやなかつた』

「むしろ誰それ、生物？ 恐竜？」

「あ、チルノじやん！ 久しづり～！」

サニーがチルノ目掛けて手を振る。

「向こうはチルノちゃんのこと知つてゐみたいだよ？」

『妖精違ひじやないかな、チルノ、なんてベタな名前たくさんいるし』

「でも、あつちの妖精こつちに近づいてくるよ？ 間違ひなく 知り合い同士が街中でばつたり会つた時の反応だよ？」

『初めて、シュレック、を見た、フィオナ姫、だつて最初は人間だと勘違いしたんだ。誰にだつて間違ひはあるさ』

「うーん 私、シュレックの映画見たことないから分からなあ」

「でも、あの時のシュレックは騎士の鎧を顔に装備してたわけだから、あれは間違えても仕方ないんじやない？ 自分を助けてくれた人物だもの、そりゃあイケメンだと妄想するでしょ」

『うわあ、会話に入ってきた　かなりナチュラルに
自己紹介のタイミングを失ったので補足説明しておくと、サニーの
後ろに控える妖精Aが「スター・サファイア」、妖精Bが「ルナ・チャ
イルド」だ。

容姿が浮かばない読者はググろづ。

「忘れちゃったの!?　サニーだよ、サニー　原作の方でもかかわつ
たじやん！」

『……あ　テメエ！　あたいの家返せヨー！』

「ぐふう　思い出してくれたなら何よつよ」

腹パン一発を代償に、サニーはチルノの記憶を呼び覚ます。

『ところで何の用かしらー！　サニーーーーこの広場は、あたいたち霧の湖
の妖精の場所なんだけどー！』

「ふん、そうね！　その通りよ！　今田ここに来た理由は言わざもが
な、この広場に用があるのだからねー！」

『な、なんだとーーー？　まさか、この広場に用があるのかー！』

「ええ、そうね！　じ察しの通り、私たちはこの広場に用があつた
のー、鋭いわねー！」

『くつそォ、…あ、つて事は眞の目的は……』

「そのとおり、眞の目的はこの広場よ……」

大妖精は察する。

あー、このサーーって子もバカなんだ

「私たち、光の三妖精、には魔法の森なんて狭すぎて狭すぎて……もつと広い私有地が欲しくなつちゃつたの！ つてことで、チルノさつさと妖精を全員連れて広場から出て行きなさい！」

『な、なんだつてー！ やはり本当の狙いはこの場所……あたいたちの広場なのか！』

「チルノちゃん、そろそろしつこい」

『チキシヨー！ 大事な遊び場を手放してたまるかア！ 出で行かないもんねーだ！』

『そ、そりだよ！ 急に来て、出でけ、だなんて理不尽すぎるよー…』

『、のび太！ 新しいバット買つたから殴らせろ！、並の理不尽だ…』
「、悪いなのび太、このゲーム3人用なんだ、にも匹敵する理不尽だよー。」

「まあまあ、落ち着きなつて2人とも、まだ話は終わつてないの」

サーーは指をチツチツチ 騒ぐな… つと手話。

「私たちも鬼じゃないわ（西瓜じゃないので）、何もせずに理不尽な要求を呑んで貰おうだなんて思つてない、空腹の相手に自分

の顔を食べると強制する某正義の男、みたいに理不尽はしないわ」

「サニー、アニメが違うわよ」

背後のルナが指摘する。

ミスったのよ と顔を赤らめたサニーは、チルノと大妖精に向き直り、ニヤリ…不敵な笑み。

「広場としても、心から楽しんで利用された方が本望でしょ！ つまり、私たち光の三妖精と、あなたたち霧の湖の妖精…遊び慣れている方が広場を利用する権利があるわ！」

『なるほどオー！』

「いや、チルノちゃん 納得しないで、立派な暴論だよ」

「どっちが遊び慣れてるかなんて実際に遊んでみなければ分からない…つまり！」

サニーの合図と共に、ルナとスターは同時に一枚の大きな紙を広げた。

【激突！ 派閥妖精！ 紛争！ 抗争！ 大乱闘！！ 広場を手に入れるのは誰だ！？】

「チルノ！ 私たちと、遊び、で勝負よ！ あなたが勝てば、私たちは大人しく手を引いてあげる… ただし！ 私たちが勝つた場合、あなた達には全員そろってここを出て行つてもらうわ！」

『な…な…』

「チルノちゃん騙されないで！」んな勝負やる意味が『よからぬ』
チルノちゃああん！」

『確かに、サニーの主張にも一理あるわ』

「ないよーー理もーチルノちゃん絶対に今の状況を理解してないで
しょ！」

『まあまあ落ち着きなよ大妖精、そつちが勝負に勝つちゃ『えば
いつも通り平和に遊べるのよ？自称最強のチルノがいれば大丈痛
い痛い痛い痛い』

「誰よあんた！栗みたいな口しやがってー！」

『ルナチャイルドですー！』

ルナの髪が大妖精によつて大変な事に。

「それじゃあルール説明ね！一度しか言わないから質問等は受け
つけないわよー！」

『え？なに？ サニー、もっかい言って』

『……それじゃあルール説明ね！一度しか言わないから質問等は
受けつけないわよー！』

「あ、ゴメン 私も聞いてなかつた」

「……今からルール説明をするわよー！」

「え、サーーなんか言つた？ もう一回こいつて痛い痛い痛い」

「あんたは聞こときなさいよー。口みたいな栗しやがつてー。」

「栗みたいな口ですー。」

ルナの髪が一度田の危機に瀕する。

「それじゃあスター！ 説明ようしぐー。」

「任せとけ！」

さらさらの腰まである黒髪でぱつつく「アー、黒い瞳、大きな青いリボン。

かなり たれ田 気味の西田を一いつ口ことさせたスター サファ イアは淡々とした口調で説明開始。

「今から私たち3人と個別に、遊び、で勝負をして頂きます あくまでも、遊び、ですので、弾幕を撃つたりとか、スペルカードを使つたりとかは危険行為、その勝負は反則負けとさせて頂きますので細心の注意を払つて下さいね …特に、ルールを平氣で忘れそうな おバカさんとかは」

『大ちゃん、いま スターが大ちゃんの悪口言つてたよ』

「ちょっと黙つてバカ」

『いまバカつて言つた？ 気のせい？ あ、気のせいいか』

何よアイツ 笑顔で人の親友に毒吐きやがつて…

スターは悪びれた様子もなく大妖精に向かって「コーコと笑顔を飛ばしている。

大妖精の勘なのだが、こういう女が一番タチが悪い。

「コホン、失礼 つまり、私たち光の妖精と計3回戦の勝負をするのです その結果、トータルで勝率の高い方がこの広場を獲得する権利が与えられる お分かりですか？」

「さすがスターね！物凄く分かり易い説明だったわ、『苦労様！』

『ちょっと待ったア！三妖精！異議あり！異議ありイ！』

おお！さすがのチルノちゃんでも この勝負の不平等条件に気づいた！

『サニーは後ろの2人と合わせて3人だけど、あたいらは2人しかいないわよ！ 人数を誤魔化しやがって！ルール説明の時にピンときたわ！ 騙そうたつてそうはいかないわ！』

え？ チルノちゃん、怒る所そこ？

「な、なに！？ バレただとオ！？」

「もう…どつちもバカ！」

「だから言つただろ『サニー、この作戦では どんなバカでも引っ掛からないと』

「ええ、やつですよ 私も栗も反対でしたのに」

「栗?」

「あー もう一いつさい！ だつたら別の妖精を連れてくればいいでしょー。ほら、チルノ！ わつわと もう一匹連れてきなさいよー。」

『えーー でも、こいつから紅魔館までは結構の距離あるしね』

「あんたは誰を呼ぶ気なの？」

「連れてきたよ、チルノちゃん」

『まあ、巻き込まれるとは思つてたんだよ』

大妖精の連れてきたモブ妖精、これが加わり、完全に勢力は均衡した。

『ふつふつふ、あたい達に勝負を挑んだことを後悔させてやるわ負けた後に泣いても、その涙まで全部凍らせて家まで運ばせてあげるー。』

「そんな手土産、ermenだわ 持ち帰るならやつねえ…氷の妖精の負け惜しみかな？」

「全く…こんなイタズラに私を巻き込んで… もうちょっと本気で作戦を考えて（（ブツブツ）

『よく分かんねエが、姉ちゃんも苦労してんだな』

「それでは良い勝負が出来る」とを願つて、始まりの握手でも

「あり？スターさん どうして手の中に画鉢^{がびょう}なんて入っているのか
しりへ。」

こゝじて、たくさんの湖の妖精が見守る中、霧の湖の妖精^ゞ光の
三妖精による仁義なき熱き戦いの火蓋^{ひふた}が切つて落とされた。

だい?わ 【光の三妖精あらわる】（後書き）

読破お疲れさまです。

はい、次回に続きます。

なぜか長編を書きたいと僕の中の妖精が騒ぎ出しまして。
これが困ったもので、僕の妖精は酷く自分勝手でめんどくさがり屋
なんですよ。

なので、次回う〇が遅れる可能性もあります。

それでは次回にお会いしましよう！

良かつたらコメント(〇〇)が原作と食い違つているね、〇〇で一次
創作書いて(など)下さい！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7036z/>

あたいと大ちゃんのあそびにっき

2011年12月27日20時45分発行